

『太陽』英文欄

——英学者としての神田乃武を巡って*

小田 三千子

I. はじめに

1. 『太陽』について

『太陽』は明治二十八（一八九五）年一月号から昭和三（一九二八）年二月号まで約三十三年間に亘って博文館から刊行された総合雑誌である。これまでも指摘されているとおり、特に明治期における思想・文化の動向を知る上で重要なメディアになっている。¹⁾ 通常号四百四十五冊、増刊号八十六冊、通巻五百三十一冊を数え、「警視庁統計書の数字」によれば、創刊年の発行部数は一号平均九万八千五百三十七と言われる。²⁾ 博文館は明治二十（一八八七）年六月の

『日本大家論集』の刊行をもって創業を開始した。その後読者の動向を睨みながら各種雑誌の統廃合と創刊を繰り返した。明治二十七（一八九四）年八月より刊行した『日清戦争実記』（全三号）が大当たりし、その元手によって、『日清戦争実記』を除いて従来からの雑誌を一切廃刊し、『日本

大家論集』『日本商業雑誌』『日本農業雑誌』『日本之法律』『婦女雑誌』の五誌を統合して、総合雑誌『太陽』を創刊した。

『太陽』創刊号は明治二十七年十二月二十八日に通信省認可を受け、二十八年一月五日づけの刊行である。和文二百四頁、英文十二頁の日本最初の大型総合雑誌で、口絵

や途中に写真彫刻銅板や銅板写真を使って視覚効果も狙っており、定価五銭という廉価で売り出された。

この『太陽』の創刊には博文館館主、大橋佐平、長男、新太郎らが明治二十六（一八九三）年に、シカゴ世界博覧会の折に北米と西ヨーロッパの出版界を見学してまわった経験が生かされている。その雑誌『太陽』の基本性格として、まず、「商品であることを至上の課題とした」ことが挙げられる。³⁾ また各分野のオピニオン・リーダー的な執筆者を登用し、国民世論形成の「公器」となりうる廉価な総合雑誌を目指す方針がはっきりと打ち出された。内容も多彩

で、論説から家庭までの各欄、政治から海外思想や世論一般までの動向紹介欄、社交案内や内外彙報、それに英文記事というように、多岐に亘っていた。紙面構成を見ると、読者が自分の関心や知的能力にあわせて記事を選ぶことを狙ったためであろうか、誌面によって漢文訓読体にはパラルビ、和文脈や口語文体やくだけた漢文訓読体には総ルビが使われている。編集方針上で重要なことは、『太陽』は通常号においては、文体の統一を行わず、文体や句読点などの記号類に関しても、各執筆者の好みにまかせている点である。このような総花主義的な編集方針は、鈴木（一九九六）の言葉を借りれば、既刊の各種雑誌統合という経営戦略と文化状況との噛み合わせによって生まれたものである。それを貫くのは、国民の「公器」、あるいは国民の教養を養うための雑誌という基本戦略だといっているのである。

2. 『太陽』英文欄について

明治初めに次ぐ、明治二十年代前後の二

度目の「英語熱」を反映していると考えられるのが、『太陽』英文欄である。広く存在する英語学習の意欲に応えるとともに、初期の『太陽』が海外市場を誇る姿勢を持っていたことも関係していると考えられる。「海の内外に三十万の読者を有する我『太陽』（第三卷二五号、広告欄）」という言葉にもこのことは示されている。実際のどの位の部数が海外に出たかは明らかでないが、外交官や商社マン、移民などを通じて、海外の読者に読んでもらうことまでも期待していたと考えられる⁽⁴⁾。十二頁に及ぶ英文欄は、日清戦争後の国家意識の昂揚と対外「膨張」主義を反映したもので、「進んで交を欧米に求め読者を世界に得ん」という意図によるものであるとする考え方もある⁽⁵⁾。

表紙に書かれた日本語誌名『太陽』の上部には「THE SUN」と英文タイトルが付られている。また裏表紙は英文表紙となっていて、誌名「THE SUN」の副題は、「A MONTHLY REVIEW OF POLITICS,

ECONOMICS, SCIENCE, LITERATURE, AND ART」で、出版年月日が囲みで付られている。また目次「CONTENTS」には、その号の掲載記事タイトルの英文訳が施されており、「英文欄」のそれは、「MISCELLANEOUS NOTES IN ENGLISH」となっている。このように、ここを開けると「英文」欄が開始されるという体裁は、現在の学術雑誌や大学紀要でとられる形式であり、その発端は『太陽』によって作られたという見方もある⁽⁶⁾。

英文欄は時代と共に、廃止されたり体裁を変えたりした。英文欄は、まず一八九六（明治二十九）年の第二巻で廃止され、目次「CONTENTS」のみ英文となった。その後一九〇〇（明治三十三）年第六巻より要目概要「SUMMARY」が英文で書かれるが、一九〇四（明治三十七）年第十巻より「THE SUN TRADE JOURNAL」として拡大された⁽⁷⁾。何故英文欄は当面一年で終わったかという疑問が残るが、これは博文館の経営方針から見て、売れなくなったから

であると考えられる。⁸⁾

一八九五(明治二十八)年第一巻に付けられた英文欄は、主として神田乃武が執筆している。乃武は九年近く米国東部に留学し、二十二歳で帰国したときには、「日本語をまず完全に忘れてしまっていた英語名人」とされている。⁹⁾第一巻第一号から十二号までに百三十六篇の記事が掲載されており、その内訳は主として日本に関するものが五十二、中国が五十一、朝鮮が二十一、英国と米国が各三、ロシアとフランスとハワイが各一、その他が三となっており、日清戦争という時代を反映する内容のものが多い。

乃武が英文欄を担当したのは、帰国後約十六年経った時であった。しかし乃武が書いた文章の英語は依然として達者で、その文体は厳かなものが多く、ギリシャ、ローマをはじめとする西洋古典文学の造詣が深いことを示している。例えば、第一号の巻頭言で日清戦争を中心とした、「RETROSPECT OF THE YEAR 1894」(一八九四

年を回顧して)がそれである。荘厳で迫力あるトーンを醸し出す、語彙や「〇」のような間投詞の使い方は、シェクスピアの歴史劇「ヘンリー五世」のト書きのうち、アジンコートの戦場の場面を彷彿とさせるものである。また同じ文章の中に、「日本の息子達は死地を脱して我々の許に戻ってきた」という表現があるが、ここで使われている「the very jaws of death」のような直喩は、乃武が書いた他の文章でも多く使われている。これは乃武がギリシャの叙事詩も良く勉強したことを示している。事実米国の大学や大学院の英文科においては、一九六〇年代においてさえ、西洋古典文学を主として教えていた。ましてや乃武の時代の米国でも、旧世界との歴史的関係が深いニューイングランド地方において、このような教育が盛んだったことは、大いにあり得ることである。

本稿の目的は、『太陽』の英文欄その他に神田乃武が書いたものや、乃武について書かれたものを資料にして調べ、乃武が単

なる明治の「英語名人」ではなく、広い意味での英学者であったことを示すことにある。このような分野で名を成した背景には、乃武個人の生来の能力に加え、それを育んだ教育が大いに関係していると考えられる。そこで、セクションIIでは、神田乃武が歩んだ英学者への道程を考察する。セクションIIIは、英学者としての神田乃武、セクションIVは、神田乃武のその他の活動、セクションVは、ディスカッションと結論である。

II. 神田乃武—英学者への道

1. 米国留学まで

神田乃武は一八五七(安政四)年二月二十七日に生まれ、一九二三(大正十二)年十二月三十日に没している。能楽師で幕臣松井永世ながひの次男として江戸に生まれ、幼名は新次郎であった。

一八六八(明治元)年に神田孝平たかひらの養子となった。養父神田孝平(一八三〇(文政十三)年九月十五日—一八九八(明治三十一)

年七月五日)は漢学から蘭学に転じ、西洋

の政治・経済に精通していた。進歩的な政治家で、一八九〇(明治二十三)年に貴族院議員に任ぜられ、一八九八(明治三十二年)には男爵に叙せられた。言語についての考え方としては、尊敬する森有礼と共に、英語が将来世界で普遍的に使われる言葉となると考え、また書き言葉を話し言葉に一致させることが望ましいと考えていた。開成所で我が国で初めて西洋数学を講じ、教えた生徒のなかに後の神田乃武とその兄がおり、二人とも秀才であった。

乃武の英語の勉強は、十歳の時に父からABCを習うことで始まった。開成所ではWebster's Spelling Bookと学校制作の英文法の教科書で勉強し、外国人教師から英語の読み方が上手だからという理由で褒美に本をもらうほど英語が良く出来た。のちに父の京都赴任に同行し、父が公務で東京に呼び戻された後も、乃武は関西に留まり、大阪の緒方洪庵の南学塾に学んだ。十二歳の時には、大学南校でParley's Universal

Historyを勉強した。

第二言語が母国語のように上手になり得る時期(いわゆるcritical period)については諸説があるが、Larsen-FreemanとLong(1991)のデータによれば、「子供の時に勉強し始めた人だけが、質量共に母国語話者なみの第二言語能力を獲得できるよ^うである」。またScovel(1981)によれば、神経学的には成熟期(puberty)に達する以前にこのような時期があるとされる。乃武は明治初期の修学のごくはじめの時期から、日本においてすでに英語を集中的に勉強し、英語で講義も受けている。そのうえ成人に達する前に米国へ行って、米国の学校で学んだのであるから、のちに母国語の日本語と第二言語である英語が一種の逆転をしたと言われても無理からぬことと思われる。⁽¹⁾

2. 米国留学時代

神田乃武は、一八七一(明治四)年二月十六日に米国サン・フランシスコ港に着き、

一八七九(明治十二)年十二月三十一日に横浜港に戻った。十四歳から二十二歳までの八年十カ月米国に滞在したことになる。その間、直接的間接的に森有礼の庇護のもとに置かれた。

森有礼(一八四七(弘化四)八月二十三日—一八八九(明治二十二年二月十二日)は、一八七一(明治四)年に駐米弁理公使として米国ワシントンD.C.に赴任するが、その折に、使節団一行三十七名の一員兼留学生として乃武も渡米することになる。森有礼は、明治初期の外交官で、初代文部大臣を務めた。薩摩藩士有恕の五男で、幼名を助五郎、のちに金之丞といった。一八六五(慶応元)年に幕府の命により英国に留学し、一八六八(明治元)年に米国を経て帰国した。一八七〇(明治三)年に小弁務使として米国に滞在し、その頃より有礼と称した。森は米国の民主主義を賞賛し、日本が友好関係を持つべき国として米国を見なした。また森は、日本に西洋文化を取り入れるために、いわゆる言文一致、すなわち

日本語の話し言葉を書き言葉と一致させる
さいに、ローマ字を採用することを論じ、
その趣旨を一八七二(明治五)年五月二十
一日付の手紙で米國エール大学のサンスタ
ックリット語学教授ウイットニー(W. D.
Whitney)に書き送っている。⁽¹²⁾

神田孝平は森の進歩的な考え方に共鳴し、
息子を米國で教育することを決意するので
ある。乃武の全生涯は、大胆な思想家であ
り政治家である森が理想的な教育と見なし
たものを具体化したもののようにも思わ
れる。⁽¹³⁾

一八七一(明治四)年の渡米時に、森は
二十三歳であった。また乃武は教えの十四
歳で、一行の最年少であった。森は、少年
を米國滞在中に日本人からできるだけ離し
て、米國人の中に住まわせることを旨とし
た。また神田孝平は乃武に毎日英語で日記
を付けるように命じた。乃武は父の言いつ
けを守り、「一八七一年二月十六日の午前
八時サン・フランシスコ到着」のことから
日記に記録し始めている。

乃武は、一八七一(明治四)年三月六日
から八月末までの約六カ月間、まずニュー
ジャージー州ミルストウンにあるコーウイ
ン(E. T. Corwin)牧師宅に滞在した。こ
こで同牧師から米國史、地理、文法、算数、
作文、手紙の書き方、聖書、速記を習い、
日曜日には教会に通った。

その後乃武は、マサチューセッツ州アマ
ーストへ移り、デイビス(Davis)夫人宅
に滞在して、一八七一(明治四)年八月か
ら、一八七九(明治十二)年までの約九年
間に亘り勉学に励んだ。まず同地の高校で、
一八七一(明治四)年から一八七五(明治
八)年までの四年間勉強した。特に英語、
ラテン語、ギリシャ語などの語学、自然科
学史、英作文、演説法などの授業科目に興
味を持ち、ここでも優等生になり、一八七
五年の卒業式には、選ばれてラテン語で挨
拶をした。

一八七五(明治八)年秋に乃武はアマ
ースト大学(Amherst College)に進学した。
一八七五(明治八)年から一八七九(明治

十二)年までの四年間同大学に在学し、西
洋古典、フランス語、ドイツ語、自然科学
系と社会科学系の科目などを履修した。同
大学が公開で開く講演会でストーリー(H. B.
Stowe)夫人やトウヘイン(Mark
Twain)、ハーインソン(R. W. Emerson)
等の話を聴く機会もあり、特にエマーソン
にのちのちも傾倒することになる。同大学
でも成績は極めて優秀で、優れた演説に対
して与えられるケロッグ賞をはじめ、数々
の賞を受けた。乃武は、同大学から、一八
七九(明治十二年)に学士号(B. A.)を授
与されている。更にずっと後の一八八八
(明治二十一年)年には修士号(M. A.)を、
一九二一(大正十)年には名誉法学博士号
(L. L. D.)も授与されている。

アマースト大学在学中の一八七七(明治
十)年に乃武は自分の言語教育家としての
一生を決定的なものにするような人に出会
った。それはボストンにあった近代語学校
のソーバー(M. Sawyer)女史との出会い
である。同女史から彼女が「自然教授法」

(methode naturelle) と呼び、乃武は「会

話による教授法」(teaching by conversa-

tion) と呼ぶ外国語教授法について学んだ。

乃武は同女史がアーマストで開いた夏季講習会にも参加し、この教授法を勉強した。

さらに同大学卒業後、日本に帰国する前の
一八七九(明治十二年七月から数カ月を
マサチューセッツ州にあるウェストフィール

ルド州立師範学校 (Westfield State Normal School) で過ごし、同校の教育制度

や「ソクラテス流」の教授法を学んだ。の

ちに日本に帰国してから、乃武は「会話に

よる教授法」を「正則法」と呼び、その普

及に努めることになる。そのさい、従来か

らの漢籍の読み方を学ぶために使われた訳

読式言語教授法を「変則法」と呼び、「正

則法」と区別した。さらに帰国して約二十

年後の一九〇〇(明治三十三年)から一年

間、乃武は、日本政府から英国およびドイ

ツに派遣され、日本の英語教育制度に新し

い血を吹き込む目的で、外国語自然教授法

の理論と実践を直接研究してることにな

る。そのさい乃武は自分がボストンのソー

バー女史から同教授法について知るべきこ

とをすでに学んでいたことを知るのである。

キリスト教の受洗もまた、アーマスト大

学在学中の出来事で、乃武の一生に影響を

与えたことの一つである。乃武は、一八七

八(明治十二年四月二十八日にキリスト

教の洗礼を会衆派教会の流れをくむ同大学

の当時の学長クラーク (W. S. Clark) 博

士から受けた。「今日受洗して、主の食卓

に初めてついた……自分の一生のうちで最

も幸せな日であった」と乃武はこの日の喜

びを日記に記している。¹⁴⁾このように受洗し

たことが、のちにキリスト教の精神に基づ

いた健全な青少年の育成を目的とする Y M

C A の日本での創設に東京で乃武が関わる

ことにつながっていくのである。¹⁵⁾

III. 英学者としての神田乃武

1. 教育家として

一八七九(明治十二年十二月三十一日

に神田乃武は横浜港に着き、母国の土を再

び踏んだ。しかし八年十カ月に及ぶ米国生

活でアメリカ人としての言語と文化がすつ

かり身につつき、父親と話すにも義弟の平岩

愼保の通訳を必要とするほどであった。そ

してその後日本語を学び直すための努力は

終生続き、妻の熊千代が良き師となった。

ただし手紙は相手が日本人の場合でも、終

生英語で書いたという。

乃武は希望通り教職につき、約四十年に

亘り広い意味での英学者として過ごすこと

となる。主として外国語教育について見る

と、一八八〇(明治十三年四月六日より

東京大学予備門の講師(英語、史学)に迎

えられたのをかわぎりに、共立学校(英

語、東京大学講師(英語、第二回中学校

並びに師範学校教員免許学力試験委員、第

一高等中学校教諭、東京大学の文科大学教

授(ラテン語、ギリシャ語)、東京高等女学

校教諭などを歴任した。一八八九(明治二

十二年元良勇次郎、外山正一と共に英語

圏で行われている教養教育(liberal edu-

cation)を目標にして、東京芝公園内に正

則予備校を創立した。初代校長には元良がなり、乃武は一八九〇（明治二十三）年十一月より一九二三（大正十二）年十二月逝去までの三十四年間に亘り、二代目校長として同校の教育に尽くした。一八九三（明治二十六）年九月高等商業学校教授となり、文科大学は講師として一九〇〇（明治三十三年）までラテン語（一時博言学も）を講じた。一八九七（明治三十）年八月高等商業学校付属外国語学校教授並びに同校主事を兼任し、一八九九（明治三十二）年四月二十一日東京外国語学校校長に任命された。一九〇二（明治三十五）年九月、近衛篤磨の懇願により、東京高等商業学校教授を兼ねて学習院教授となり、一九一一（明治四十四）年九月、依願退職までの九年間を学習院英文科の主任、または科長として学習院のために尽くした。学習院辞職後はもっぱら東京高等商業学校教授として務め、一九一六（大正五）年一月名譽教授第一号になった。⁽¹⁶⁾

2. 神田乃武の代表的著作

乃武はアメリカ留学から帰国後直ちに英語教育に従事したが、その人柄と学殖のため、教育界、学界はもとより、政界、実業界、社交界にも多くの知己があつて、ことに英語教育界はほとんど、彼を中心として動いていた一時期さえあつたと言われる。新しい英語教授法に対する乃武の意見は、外山正一の所説とともに、広く英語教育界に重んじられた。

(1) 英語教授法に関する論文

「English in Middle School」（中学校における英語）（一八九六〔明治二十九〕年）は『太陽』第二巻第四号の教育欄（二二一―二三四頁）に掲載された論文で、「外国語自然教授法」に基づいた乃武の英語教授法論を最も良く伝えるものの一つである。次はその主旨である。

「戦争には勝つたが、これからは商業戦に勝たねばならぬ。外国語学習はその有力な武器の一つである。」

中学校は外国語教育の基礎をつくるべき時代であるのに、教授の効果はあがらず、十分な学力がついていない。根本的な原因は、①中学校における英語学力の標準が明瞭でないことと、②有能な教師の不足である。これまでの上級学校は入学試験にあまりにも難解な問題を出したために、中学校において難解な教材を用いて訳読を過重する傾向があつた。また中学校においては、音と意味とを離して教える傾向、機械的訓練の不徹底、英語各分科の孤立は全国的に見られる通弊である。これと関連して今日は学力の十分な教師が非常に少なく、ことに英語の practical knowledge を著しく欠いた教師が多い。英語教師は英語の各方面の知識をもつと平均的に伸ばさねばならぬ。それでは教授法は如何に改善するか。Ollendorff や Prendergast などの教授法は学校生徒には不適當とは言え、基礎的訓練および順序を追つて易より難に進むことを重んずる点は良い。教科書について言えば、文部省会話読本、崎山氏の「英語教授書」

のような平易なものが良い。最初の約二年間は十分に基礎的練習を積み、Direct Readingの習慣をつけることができる。

会話は既習の読本教材に基づき、聴取あるいは問答によって行うのが良い。少し程度が進むにつれて、生徒に興味のある平易な物語、伝記、旅行記などを選び、会話、作文、訳解の力をつける。これが Natural Methodである。英語の慣用句も語彙もこの方法によってこそ正しく習得される。文法は必要に応じて教え、文法のみを切り放して教えない》

(2) 英語教科書の執筆および編集

神田乃武は数々の英語教科書を執筆あるいは編纂し、それらは明治・大正を通じて広く使われた。例として「Kanda's Crown Readers」第一巻から第五巻（一九一六〔大正五〕年 三省堂）がある。(1)に挙げた英語教授法の論文の骨子を生かす形になっている。易から難へと徐々に進んでいく。教科書の序文にも述べられているように、

学習者の役に立つ普通の英語の文が英国人の生活ぶりを示すような挿絵と共に提示されている。挿絵担当者には英国人の画家を起用している。第一巻では、本文の後に発音練習があり、第二巻以降では、文法、新出語句表、発音練習がついている。やはり序文に言及されていることであるが、各章のテーマは、当時英国や米国で出版されていた教科書から幅広く取り上げられている。

乃武が執筆したものは英作文の教科書もあり、A Modern English Composition（一九一六〔大正五〕年 三省堂）やKanda's Crown English Composition（一九二〇〔大正九〕年）などがその例である。乃武自身その留学中はもとより帰国してからも英語で文章を書くことが多かった。そして『太陽』第一巻第四号（一八九五〔明治二十八〕年）の英文欄に「Must a Japanese give up the idea of ever learning to write English?」という文章を書いている。その骨子は以下の通りである。

《例えば米国の名門大学へ留学した経験の

ある日本人でも、書く英文が英語の母国語話者ほどではないと批判されることがある。

しかし日本は今や外国人と隣合わせに住む時代になっており、外国との商取り引きはますます盛んになっているから、我々は英語で自分の意見を発信することがいっそう必要になっている。しかし英語と日本語は大層異なっているのに、英語を母国語話者並みに文法上の間違い無しに書くことは、不可能に近い。かの有名な頼山陽でさえ、日本語を母語とする人並みに日本語を駆使することは一生できなかつた。日本語の「てにをは」を間違ひなく使える中国人に私はいまだかつて会つたことがない。このように見て行くと、日本人の英語学習者が冠詞の用法でつまずいても、不思議なことではない。我々英語学者は、練習を積みばいつの日か完璧になることを願って、英語でもっと書くべきである。日本語で英語の効用について長々と書くよりも、たとえ短い文章でも自分自身英語で書くことにより英語の普及にもっと効果的に寄与すること

が出来るのである》

現代の我々には、発信型の英語教育が求められ、公立小学校への英語教育導入が実験的に行われていることは周知の通りである。上記の文章から分かるように、明治の世にあって神田乃武は書くことにおいてもすでに発信型のコミュニケーションの必要性を唱えていたのである。

(3) 文法書の執筆

乃武は文法書も何冊か執筆している。なかでも二巻からなる神田英文典（一九〇九〔明治四十二年〕）は、広く使われていた。谷崎潤一郎の小説「痴人の愛」（一九二四〔大正十三年〕）は、関東大震災前の風俗を映し出すものであるが、この小説に、下記の引用に示されるように、神田乃武の英文典が定番として当時用いられていた様子⁽¹⁷⁾がうかがえる記述がある。

《一体ナオミは、音楽の方はよく知りませんが、英語の方は十五の歳からもう二年ばかり、ハリソン嬢の教を受けていたのです

から、本来ならば十分出来ていい筈なので、リーダーも一から始めて今では二の半分以上まで進み、会話の教科書としては“English Echo”を習い、文典の本は神田乃武の“Intermediate Grammar”を使っています、先ず中学の三年ぐらいな実力に相当する訳でした……》

しかし、ナレーター⁽¹⁸⁾の私「川合先生」には、ナオミの英語の実力は「中学の二年生にも劣っているように」思える。和文英訳をやらせて見ると、過去分詞その他の使い方を実際のに心得ていい筈なのに、それがまるつきり成っていないのである。ところがハリソン嬢は、「日本人、みな文法やトランスレーションを考えます。けれどもそれは一番悪い。あなた英語を習います時、決して決して頭の中で文法を考えてはいけません。トランスレートしてはいけません。英語のまま何度でも何度も読んで見ること。これが一番よろしいです」といい、ナオミの発音とリーディングを褒め、「今にきくと巧くなります」と太鼓判を押すのである。

このような二人のやり取りの対象になっているナオミが使っているのが、実際の英語を提唱している神田乃武の英文典であるところにユーモアが感じられるのである。

(4) 英語辞典の編纂

神田乃武は英語辞典の編纂でも大きな貢献をしている。例えば新訳英和辞典（神田乃武等編一九〇二〔明治三十五年〕年 三省堂）は、現在も三省堂から出版されているコンサイス英和辞典に引き継がれている。また神田等のこの辞典は、後に岡本由三郎によるものが出るまで、原文が英語の文学作品を翻訳者が日本語に翻訳するさいに使っており、その意味でも当時の人々に大きな影響を与えた訳である。

3. 英語教育関係の公的活動

乃武は政府の英語教育関係のいくつかの委員会で活躍した。文部省の英語教員検定試験委員会委員を務めたこともその一つである。教員検定試験に関する乃武の見解は、

『太陽』第二卷第十三号（一八九六〔明治二十九〕年）の教育欄に掲載された「Examination for Teacher's License」からも推察される。その主旨は以下の通りである。

《第九回教員検定試験が終わった。第一日目の試験は書き取りで、所用時間は半時間であり、三度読んだ。一度目はただ聞き取らせ、二度目に書き取らせ、三度目に補足修正させた。問題はジャパン・メール紙より抄出した。午前中の残りの時間は、筆答試験（英文和訳および和文英訳）に当てられた。後日同じ書き取り文を高等商業学校の各級の生徒に課して、その成績を教員試験の成績と対照した。誤字の平均は、教員検定試験受験者が十二・六で、高等商業学校生が八・六であり、後者の方が成績が良かった。教員検定受験者六十四名中二十六名が第一日目の試験に及第した。

第二日目は口頭試験で、デ・クインシーの論文、モラル・アンド・インテレクチュアル・カルチャーの中から選んだ。この論文は、アップルトンの第五読本に収録さ

れている。受験者にまずウェブストル大辞典を与え、二十分間の下見をさせた。次に受験者に、筆答試験から抄出された誤文を与え、正させた。それから受験者を一人ずつ試験委員の前に呼び出し、問題の文章を朗読させ、直訳ではない解釈をさせた。続いて問題の文章について二三文法上の試験と会話の試験をした。その結果として十八名が通過した。最後の三日目の試験は教授法の実技で、各受験者が教壇に立ち、試験委員一同は生徒となって教授を受け、試験委員が二三の質問をしてその教授法を試験した。その結果、最終的に及第者は九名（内男子七名、女子二名）となった》

この引用箇所から分かることは、試験委員（神田、谷田部、小島）が実際的な文章を材料にして、教員検定試験受験者の四技能、すなわち読み、書き、話し、聴く力をいろいろな角度から調べ、教授法の実技試験まで行っている点である。試験の申込者は百名だったが、実際に受験したのは六十四名、そして最終的に合格したのは九名で

あった。当時受験者は種々の課目の受験申し込みをして、一課目に失敗した時に備えた。そのために、申込者数と実際の受験者数との間に大きな差が生じている。

IV. 神田乃武のその他の活動

1. 東京基督教青年会（YMCA）の創設

乃武は渡米後間もなくコウイン師と共にニューヨークにあるYMCAを訪れたのが同機関との初めての出会いである。日本に帰国してから一八八〇（明治十三年）年初めに東京YMCAの創設に尽力する。米国から持ち帰ったYMCAに関する資料を提示し、井深梶之助、田村直臣、小崎弘通らの協力を得て、青少年の健全な育成を目指して、同年五月には東京基督教青年会を正式に設立し、京橋（銀座）教会で発会式を挙げている。⁽¹⁸⁾

2. 羅馬字会の創設

ローマ字運動の流れにあって、一八八五（明治十八）年にローマ字を国字にする目

的で、「羅馬字云」(委員長 外山正一)を神田乃武は外山等と共に設立し、その幹事となった。この会のつづり方は英語式を基本とする。これが翌一八八六(明治十九)年に「和英語林集成」第三版に採用され、へボン式の名で広く行われるようになった。その特徴は、サ・ザ・タ・ダ・ハの各行の子音を一つに統一せず、音の相違に従って使い分けていること、撥音の表記が *Shim-bu* に見られるように *ロ・ロ* の二種類に区別されていることなどである。このつづり方は、一九〇八(明治四十一)年に「ローマ字ひろめ会」において多少修整され、修整へボン式または標準式とも呼ばれた。¹⁹⁾

この運動の先行きについて乃武は、一九〇九(明治四十二)年には樂觀的で、「ローマ字が学校で採用されるようになり、今や子供たちに教えて良い結果を得ている。また人々はこの運動を好意の目をもって見始めている」と述べている。しかし、三年後の一九一二(明治四十五)年には悲觀的になつてゐることが、「長年の慣れと一般の

人々の偏見の流れに抵抗することは難しいことである。そして筆者が子孫にもたらしたいと思つてきた恵みは、曾孫の時代になつても実現しないかもしれない」という言葉に表れている。²⁰⁾

3. ヨーロッパ視察旅行

一九〇〇(明治三十三)年六月に神田乃武は英語教授法研究のために、英国とドイツの二カ国へ一年間の出張を政府から命ぜられ、同年八月十一日に横浜港を出発し、翌一九〇一(明治三十四)年十二月十一日に神戸港に到着し、翌日陸路東京に帰った。この視察旅行は時の文部大臣樺山資紀伯の計らいによるものであった。横浜港を發つた乃武は、米国を経て英国に行き、フランスからベルギーを通過してドイツに入り、ここに約四カ月滞在し、外国語教授の実状を詳しく視察した。乃武が英文で書いた日記によれば、ドイツでは、まずキールに二カ月ほど滞在したが、ここで一九〇〇(明治三十三)年十一月十九日に「あねさき」の

出迎えを受け、何くれとなく世話をしてもらい、十一月二十一日にはその下宿に泊めてもらつてゐる。十一月二十五日には、二人でドイセン(Doyssen)教授を訪問している。日記のこの部分は、神田乃武と姉崎嘲風との間に接点があつたことを示している。乃武はキールでは、クルム(Krumm)教授宅に滞在し、食事付きで一カ月の部屋代は百七十五マルクであつた。ちなみに姉崎の部屋代は月三十マルクほどであつた。

またベルリンでは「ふくだ」が乃武の世話をしたが、この地で一九〇一(明治三十四)年二月十日に『太陽』が一部乃武の許に日本から届いている。

ドイツはもとよりの国に行つても、乃武は貪欲なまでに知識慾旺盛であつた。教育機関の関係者に会つて新外国語教授法についての意見を求め、授業や講義を參觀し、本を買い求めては日本に発送させた。その一方、美術館、博物館、動物園、歴史的建造物などを見物し、音楽会にも出かけている。ロンドンではウェストミンスター寺院

が気に入り、一度ならず訪れて、かつてその文学作品を学んだ巨匠たちの胸像の前に、その偉業に思いをはせている。⁽²¹⁾

乃武は様々なタイプの授業をドイツで見ているものの、乃武がドイツの新外国語教授法の特徴としてメモに残したとされるものとして、次の点が挙げられる。①初めは口頭による教授のみ。②初めから通してできるだけ外国語のみを使う。③上級を除き、母語から外国語への翻訳を全く入れないか、あるいは部分的にのみ入れる。④外国語から母語への翻訳を最小限に抑える。⑤年少者の授業では絵などを使って、できるだけ具体的に物事を提示する。⑥外国の実状、すなわち生活、習慣、制度、地理、歴史、文学などができるだけ取り入れる。⑦予習あるいは復習の形で、読んだ本について絶えず会話をする。⑧文法を帰納的に学ぶ材料として読本を使う。⁽²²⁾但し乃武は一八七七年にポストンのソーバー博士から新外国語教授法を学んでいたので、ヨーロッパで見聞したことは、すでに持っていた

知識を補足する程度のものであったといわれる。⁽²³⁾

4. 国民外交

神田乃武は英学者としての活躍に加えて、国民外交の面でも大いに活躍した。

(1) 一九〇九(明治四十二年)秋 商業使節団の一員として米国へ

渋沢子爵を团长とする使節団の一員として米国に派遣され、日米間の友好を深めるために三カ月間に五十余の主要都市を訪れた。使節団のスポークスマンとして、あちこちで英語によるスピーチをおこなった。

(2) 一九二一(大正十年)年 万国商業会議でリスボンへ

乃武は一九一〇(明治四十三年)年に貴族院議員に選ばれており、一九二一年にはその代表としてポルトガルのリスボンで開かれた上記の会議に出席し、帰途六月二十二日に、米国の母校アマースト大学創立百年

祭の祝典に出席し、名誉法学博士号(L.D.)を授与され、九月に帰国した。

(3) 一九二一(大正十年)年十月 ワシントン軍備縮小会議で米国へ

乃武は帝国全権大使徳川公の顧問として上記会議に出席するために再度渡米した。米国に多くの知己がある上、達者な英語で演説をすることにより、四カ月に亘る軍備縮小のための難しい交渉を成功裏に終え、翌一九二二(大正十一年)二月帰国した。

帰国後健康が優れず、治療の甲斐もなく、一九二三(大正十二年)十二月三十日に癌のため六十七歳で不帰の人となった。翌一九二四(大正十三年)年一月四日に関東大震災後間もない東京商科大学仮講堂で、内村鑑三司式のもとに簡素で感銘深い、キリスト教式葬儀が執り行われた。

V. デイスカッションと結論

神田乃武は、十四歳から約九年米国東部

に留学し、二十二歳で帰国した時には、父親と話すのにも通訳を必要とするほど日本語を忘れてしまい、それがほぼ終生続いた「英語名人」であったとされている。しかし本稿の目的は、神田乃武が単なる「英語名人」ではなく、広い意味の「英学者」であったことを示すことにある。公器と称される総合雑誌『太陽』第一巻に付けられた英文欄を主として執筆したのは、帰国後約十六年経った一八九五（明治二十八）年のことである。それにも拘わらず、乃武の文体は厳かなものが多く、ギリシャ、ローマを初めとする西洋古典文学の造詣が深いことを示している。

乃武は、進歩的な学者であり政治家である神田孝平の養子となり、その庇護のもとに、当時の日本でも大変に恵まれた環境で教育を受けた。英語については、ABCを十歳の時に父から習い、開成所、南学塾、大学南校でさらに集中的に学んでいる。

その後森有礼の庇護のもとに、一八七二（明治四）年二月に米国の地を踏んだ乃武

は、父の命に従い、その日から英語で日記をつけ始めている。ニュージャージー州のコーウィン師宅でも、マサチューセッツ州のアマーストの高校や大学にあっても、乃武は新しい環境に柔軟に適応し、しかも自分の興味のある授業科目で優れた成績をあげている。また西洋古典文学やエマーソンの作品等のアメリカ文学を深く勉強すると同時に、大学在学中から自分の天職は外国語教育にあると自覚し、そのための準備を着々と進めた。特にボストンのソーバー博士の新外国語教授法との出会いは、乃武の進路を決定づけるものであった。キリスト教の受洗も乃武の一生に影響を与えるものであった。

一八七九（明治十二年）に帰国すると直ちに乃武は語学教育に従事し始める。また外国語教授法に関する論文、英語の教科書、文法書、辞典などを執筆あるいは編纂し、明治・大正を通して人々に大きな影響を与えた。

また『太陽』第一巻第四号（一八九五

〔明治二十八〕年）英文欄で、「英文を書く」ことによる発信型のコミュニケーションの必要性を訴えている。同じく『太陽』第二巻第十三号（一八九六〔明治二十九〕年）の教育欄に英語教員検定試験について執筆しているが、同検定試験委員会委員としておこなった試験の傾向を見ると、未来の英語教員に対して、知的な英語の運用能力を求めていることが察せられる。発信型コミュニケーション能力の究極的なものが、乃武が国民外交の場で駆使した英語による交渉能力に示されているともいえる。またローマ字は英語ではないが、国字をローマ字におきかえることを目的とする羅馬字会の創設に乃武が尽力したことも、発信型コミュニケーションの精神に通じるものである。かつて恩人森有礼がエール大学のウィットニー博士に手紙で同様の主旨のことを書き送り、博士からたしなめられたと言われるが、たとえそのことを知っていたとしても、羅馬字運動に対する乃武の熱意は変わらなかったのではないかと思われる。

ドイツの新外国語教授法の特徴の一つとして乃武は「外国の実状、すなわち生活、習慣、制度、地理、歴史、文学などを授業にできるだけ取り入れる」ことをメモに書き残している。またドイツで乃武が視察したことは、ほとんどすでにボストンでソーパー博士から乃武が学んでいたことも Ueda (1927) に示されている。

以上のことから、神田乃武は単なる「英語名人」ではなく、名実ともに広い意味の「英学者」であったといえる。

注

* 筆者は一九九六年一月より本研究会に参加させていただいており、「太陽」およびその関連資料入手のさいの便宜や貴重な教示を鈴木貞美代表並びに共同研究員各位よりお寄せ頂いている。いちいちお名前を挙げないが、心よりの謝意を表したい。本稿の一部は、一九九六年九月二〇日に開かれた共同研究会で、「太陽」英文欄——神田乃武のことなど」という題目で筆者により報告されている。

(1) 鈴木 (一九九六) 参照。創刊期『太陽』について詳しく述べられている。

(2) 永嶺 (一九九一)、二〇頁参照。

(3) 鹿野 (一九六一)、一三七頁参照。

(4) 鈴木 (一九九六)、六七頁参照。

(5) 永嶺 (一九九一)、二七頁参照。

(6) 中川 (一九九六)、一三一頁参照。

(7) 鈴木 (一九九六)、七六頁の注(7)参照。

(8) 鈴木貞美 (一九九六年九月二十日、個人談話、於国際日本文化研究センター共同研究会)

(9) Ueda (1927) の一一二—一一三頁および太田 (一九九五) の一三三頁参照。本稿において神田乃武の履歴の詳細については、Ueda (1927) および小沢 (一九六五) を参考にした。以下 Ueda からの引用の原文はすべて英語で書かれており、筆者が適宜和訳した。

(10) Larsen-Freeman and Long (1991)、一六四—一六六頁参照。現在成熟期は九歳ごろとされ、この時期に合わせて日本の公立小学校に英語教育を導入する実験が現在行われている。

(11) 太田 (一九九五)、一三一—一三五頁参照。「神田乃武のような明治の人は、漢

籍の教育を十分に受けていたから、英語の達人になれた」という考え方もある(鈴木貞美、一九九六年九月、個人談話、於国際日本文化研究センター)。この考え方は、一つ目の外国語を修得するさいに使った方略を二つ目の外国語でも生かせるので、後者の修得がより速やかに行われるという考え方に通じるものと考えられる。

(12) Unger (1996)、一四—一六頁参照。森の手紙に対するウィットニーの反応は否定的なものであったことが知られている。

(13) Ueda (1927)、九頁参照。

(14) Ueda (1927)、一九頁参照。ただし乃武は、自分の受洗に否定的な記事を書いた日本の新聞についての報道を米国で読んだことも一八七八(明治十一年八月九日付)の日記に記している。クラーク博士に反感を持つ者の書いた記事であった(Ueda [1927]、一〇頁)。

(15) Ueda (1927)、二六頁参照。

(16) 小沢 (一九六五)、二六一—三〇頁参照。

(17) 新潮文庫版、五四頁より引用。

(18) 「日本キリスト教歴史大事典」(一九八八)の三四七—三四八頁および Ueda (1927)、二六頁を参照。

(19) 佐藤喜代治 (一九七七)、『二六九頁参照。』

(20) Ueda (1927)、『二七頁参照。』

(21) Kanda (1900-1901)、『*Memorials of Kanda Naibu*』三四九-五二六頁参照。』

(22) 市河 (一九六二)、『一九七頁参照。原文は英語。訳文は筆者によるものである。』

(23) Ueda (1927)、『一八頁。』

参考文献抜粋

市河三喜 (一九六二)。「英語教授法事典」東京 開拓社。

Kanda Memorial Committee ed. (1927). *Memorials of Naibu Kanda*. Tokyo: The Toko-Shoin. および東京 大空社復刻版 (一九九六)。

鹿野政直 (一九六一)。「太陽」—主として明治期における『思想』四五〇号 (十二月号)、『一六一五—一六二六。』

Kanda, Naibu (1916). *Kanda's Crown Readers*, 1, 2, 3. Sansendo. 東京 大空社復刻版 (一九九三)。「英語教科書名著選集」第一九巻。

Kanda, Naibu. "Naibu Kanda's Journal: A trip round the world (1900-1901)." In

Kanda Memorial Committee ed. (1927). *Memorials of Naibu Kanda*. Tokyo: The Toko-Shoin, 349-516.

Larsen-Freeman, Diane, and Michael H. Long (1991). *An Introduction to Second Language Acquisition Research*. London and New York: Longman.

永嶺重敏 (一九九二)。「明治期『太陽』の受容構造」『出版研究』二二一号。講談社、二二一-二五五。

中川成美 (一九九六)。「共同研究報告」『国民国家の形成と『太陽』——海外情報欄をとおして』国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第15集。東京 角川書店、一九一-一三八。

日本近代文学館編 (一九八四)。「日本近代文学大事典」東京 講談社。

日本キリスト教歴史大事典編集委員会編 (一九八八)。「日本キリスト教歴史大事典」東京 教文館。

太田雄三 (一九九五)。「英語と日本人」講談社学術文庫およびT.B.S.ブリタニカ (一九八二)。

小沢昭子 (一九六五)。「神田乃武」近代文学研究叢書 第三三巻。東京 昭和女子大学

近代文学研究室。

佐藤喜代治編 (一九七七)。「国語学研究事典」東京 明治書院。

鈴木貞美 (一九九六)。「共同研究報告」『創刊期『太陽』論説欄をめぐって』国際日本文化研究センター紀要『日本研究』第13集。東京 角川書店、六三-七六。

谷崎潤一郎 (一九二四)。「痴人の愛」東京新潮文庫。(一九四七)。

Ueda, Tatsunosuke (1927). "Naibu Kanda, 1857-1923." In Kanda Memorial Committee ed. *Memorials of Naibu Kanda*. Tokyo: The Toko-Shoin, 3-33.

Unger, J. Marshall (1996). *Literacy and Script Reform in Occupation Japan: Reading between the lines*. New York and Oxford: Oxford University Press.

追記

この号で扱えなかった神田乃武のアメリカ観の一部については、拙稿「総合雑誌『太陽』とことば——明治の英語名人、神田乃武をめぐる」(東北学院大学論集「人間・言語・情報」第一一五号 (一九九六)) に書いた。